

『法華経』にみる菩薩の精神

マルガリータ・ー・ヴォロビヨヴァーデシヤトフスカヤ

道口幸恵 訳

本日は、『法華経』や大乘教、及び仏教全般において重要な位置を占める菩薩についてお話したいと思えます。菩薩 (bodhisattva) は、菩提 (bodhi) を得ることのできる境地を達した「衆生」(もしくは人間)と訳されます。菩提とは、悟りのことであり、仏の得た境地のことです。つまり、菩薩とは、悟りの準備ができていて人間のことです。そして、悟りを得れば仏になれるということです。このように定義していくと、様々な疑問にぶつかります。

一、菩薩が得た境地とは何なのか？

二、「得た」とはどういうことなのか。どのように、何によって得たのか。

三、菩薩がすでに悟りを得る準備ができているとしたら、なぜすぐ得ることができないのか。何が妨げとなっているのか。

四、一体、菩薩の存在はどこから現れたのか。仏教には常に存在していたのか。仏教が成立し発展していく様々な時期において菩薩はどのような役割を果たしてきたのか。

周知の通り、仏教はその発展段階において長い道のり

を経てきております。それは、ブッタの「四諦」や「八正道」に関する説法から始まり、独自の神々や儀式、寺院、聖職者を持つ大衆宗教に至るまでの道のりです。いかえれば、釈尊の教えに従い、戒律を守る生活や社会的平等に関する教えを体得した弟子の集団が形成された時期から、教団内に信仰者間の複雑な階層ができ、国家と教団との特殊な相互関係がそれぞれの国に形成されていく時期までです。では、これらの疑問に答えていきたいと思います。

菩薩に関するイメージは、西暦初期、つまり、仏教がインドから新しい地域に広がっていった時期に生まれしました。釈尊入滅後の六百年間に、仏教の教義の上で、重大な出来事が起きています。

まず、第一に、弟子の分裂です。この分裂は、時とともに、だんだん色濃くなり、異なった流れをくむ弟子たちは、単に思想的に分かれていっただけではなく、地域的にも分かれていきました。このように分裂し、次第に、思想の違いを定着させ、体系化していきました。

第二に、これが最も大事な点ですが、仏の教えが弟子

たちによって書きとめられたことです。師匠の説法すべてを分類し、集成した仏教聖典が作られました。こうして、「三蔵」が出現します。「三蔵」とは、文字通り、「三つの籠」という意味です。これは、第一に「律蔵 (vinaya pitaka)」、つまり、「聖職者の禁戒儀則」、第二に「経蔵 (sutra pitaka)」、つまり、「仏教の教義を明かす文献を集めたもの」、第三に「論蔵 (abhidharma pitaka)」つまり、「釈尊の所説を哲学的に明らかにした文献を集めたもの」です。ここであえて、誰もがよく知っていることについて言及したのは、本日、私たちが取り組むべき内容に関連しているからです。

このようにして、仏教が広範囲に広まり、北と東、つまり、中央アジアのオアシスである現在の中国の新疆や、中国、チベットに伝わる頃には、仏教は、サンスクリット語や北西プラークリット・ガンダーラ語で書かれた聖典に集成されておりました。この聖典は、「声聞乗」、もしくは、「声聞のための乗り物」、つまり、教えの道に入った弟子、文字通りの意味で「聞く」弟子のための教えです。經典の名前については、この程度にして

おきましょう。

声聞乗が目指す理想は、阿羅漢果でした。阿羅漢は、文字通り、「修行をし、成仏の権利を受けた者」との意味で、単独で修行し、仏のあらゆる教えに従い、教団のあらゆる修行（出家、受戒など）を経て教団を離れ、あらゆる苦行を行い、生活上のすべての執着を立ち切り、神通力を得、悟りの準備ができた人です。しかし、阿羅漢が得た悟りは、自分一人のためだけのものであり、そこに、声聞乗が修行者に示せる道の限界がありました。ですから、声聞乗は、一世紀に「小乗教」と呼ばれるようになりました。

阿羅漢果の道は、結局、新しい信者を多く惹きつけることはできませんでした。第一に、あまりにも修行に時間がかかりすぎました。阿羅漢果への道において主要な指標は、輪廻を決めるカルマでした。第二に、孤立した修行者としての阿羅漢の姿は、仏教が惹きつけようとしていた在家が後に続くかと思えるものではありませんでした。そこで新しい信者を惹きつけるために現れたのが、まさに菩薩でありました。菩薩のモデルになったの

に、このときより、大衆に開かれた幅広い倫理的、宗教的、哲学的思想として仏教の新しい流れが始まります。そして、その流れは、「小乗教」と呼び名が定着した「声聞乗」に対し、「大乘教」と呼ばれるようになりました。

「大乘教」の初期の經典は、サンスクリットの写本、經典の目録や、二世紀から四世紀の漢訳經典によって、その存在がはっきりと確認されていますが、そこには菩薩の理想像に関する初期の記述や菩薩の道德規範が含まれています。大乘經典としてまず挙げられるのが、『法華經』です。これから『法華經』について細かくみていきたいと思っています。

菩薩の理想像は、『法華經』第四章、Sukhavhar-aparivartah（「安樂の境地に関する章」）、鳩摩羅什の漢訳で「安樂行品」と呼ばれる章に描かれています。この章で仏は弟子たちの前で、困難な時代が訪れ、信仰が衰退した時、仏教を流布すべく、未来の菩薩たちに最も大切な『法華經』を授けます。菩薩が『法華經』を布教できるのは、不動の境地に住し、理想的な菩薩として必要な

は釈尊自身でした。釈尊の前世の姿に関する数多くの説話、いわゆる「ジャータカ（本生譚）」や、釈尊自身の人生を描いた「普曜經（Lalitavistara）」や「大事（Mahavastu）」などの文献は、他者救済によって自己完成の道を歩み、悟りに達する人物像を創造するための基礎となっています。そして、このような人物は、悟りを得た後には涅槃に入るところをあえて入らず、人々の中に残り、皆を助けていきます。まさにそのような慈悲深き人物が、菩薩として經典に登場するようになります。菩薩は、その立場と役割において、阿羅漢とは全く正反対の立場に立っています。菩薩は、人々のために人々の中で生き、信仰者だけでなく、まだ道に入ったばかりで困難を感じている人々をも助けていきます。菩薩の行動は、大衆を仏の教えに惹きつけ、その結果、多くの人々が人生のよりどころを得ていきました。こうして、仏教の新たな信奉者の大きな流れができ、仏教はインドの国境を越えるようになりました。と同時に、こうした新たな思想が加わることにより、仏教の教えそのものが新しい発展段階をむかえることになります。まさ

四つの規範を守っているときに限られます。では、それは、どんな規範なのでしょう。

第一に、菩薩の行動や他者との接触に関する規則です。菩薩は、自分の行動において、ねばり強さ、高潔さ、寛大さ、忍耐力を発揮しなければなりません。菩薩は、残酷であってはならず、確信がなければなりません。また、物事の本質をすべて理解した上で行動しなければなりません。

次に、菩薩はどのような人との接触をさけるべきでしょうか。この点を探るとき、經典の起源や、書写されるようになった頃の經文の民主主義的性格がわかります。まず、菩薩は、権力者や王子、上級の大臣、行政府の高官などと近しくしてはいけません。その他、菩薩の名譽を傷つけるような交流、たとえば、他宗教徒や異端的セクトの人々、危険な娯楽に携わっている人、俳優、ボクサー、狩猟や釣りの愛好家、そして、死刑執行人などとの交流が制限されます。さらに、場違いな質問をして菩薩を論争に引き込もうとする比丘・比丘尼との接触にも慎重でなければなりません。また、布施を求めて他者の

家に行った場合、菩薩は仏の教えのこのみを考え、生活上の問題に巻き込まれてはいけません。以上が、『法華経』を広める菩薩の行動に関する第一の規範です。

菩薩が守るべき第二の規範に関して説明をする前に、初期の『法華経』に関してだけでなく、いわゆる「空(shunyata)」という教義の起源に関しても光をあてるような重要なコメントをしておきたいと思います。ロシアの仏教学者は、「空」を「すべての法(ダルマ)の非主観性・非客観性」、「実質のないこと」、「中身がまつていないこと」などと解釈しています。「空」の概念を菩薩の境地と結びつけて考える『法華経』においては、初期の解釈に従っており、瞑想と直接的な関係を持っています。では、『法華経』の解釈をみてみましょう。

瞑想を行う能力、これは、理想的な菩薩が備えていなければいけない資質です。では、どのように瞑想を行うべきなのでしょう。菩薩は、ある一定の客体に注意を集中させ、その客体が空間の中を移動しない、固定されたものであるとの認識をまず確立させます。そして次に、この客体の輪郭や形が消えていくことを感じます。

に入ることでもあります。金剛乗のトランスも、これとある程度似ておりますが、現実の世界を去り、金剛神と一体になることです。以上述べたように、『法華経』に説かれる理想的な菩薩の備えるべき第二の特質は、瞑想を行う能力です。

第三、第四の特質は、『法華経』を広める菩薩の精神面に関するものです。

第三の特質は、大いなる忍耐力です。菩薩は、他の伝道者の話や文章に間違いを見つけなくても、それを喜んで、公衆の面前で指摘してはいけません。また、菩薩道に入りたいという比丘・比丘尼、在家がいた場合、菩薩道の困難さを指摘して思いとどませたり、疑いを起こさせるようなことはしてはいけません。さらに、菩薩の弟子の中に、ダルマに特別の関心を寄せる者がいたとしても、特別扱いしたり、他の弟子より多く教えたりしてはいけません。生きとし生けるものすべてに対し、同じ思いやりの気持ちで接しなければいけません。すべての仏に対しては、実父のように接し、十方の菩薩を尊敬しなければなりません。

その後、感覚器官で通常認識される色や特質も消えていきます。最終的に、客体のあった場所には空間だけが残ります。これで、菩薩は、現実の世界から完全に離れたことになります。現実世界に戻るためには、この世はすべて因と縁による存在であり、原因とそれによってもたらされた結果による現象であると深く認識します。そして、瞑想の対象としていた客体の内面的・外面的特徴を少しずつ復活させていきながら、菩薩は現実の物質の世界に戻ります。これが、「一番最初の」と言わないまでも、初期の頃の「空」に関する解釈の試みでした。後に、この概念は、哲学的な裏付けがなされるようになり、文献がどの学派に属するのかを判断する基礎になりました。

次にもう一つ指摘しておきたいことがあります。「瞑想」や「集中」をシャーマニズム的な、金剛乗のトランス(恍惚状態)と混合してはいけません。ただし、学術書では時々、瞑想をトランスと呼んでいる場合もあります。シャーマニズムのトランスは、実際に現実世界から脱出することですが、と同時に幻想的物質と現象の世界

このような資質から四番目の行動規範が生まれます。もし、『法華経』を信じようとし、理解しようとし、悟りを得た後にその人たちも、真のダルマの道に導くことを自分に誓わなければなりません。

こうした規範を守るならば、菩薩は過ちを犯すことなく、人々に、そして神々に『法華経』を説いていくことができます。『法華経』が読まれず、学ばれていないような国、理解されていない国は、無数にあり、目で見える範囲を越えており、その国の名前をすべて挙げることもできない。

『法華経』において初めて大乘教は、「菩薩乗」もしくは「菩薩の乗り物」と呼ばれるようになりました。

仏の教えにおける菩薩の果たせる役割を論証しようとする試みは、大乘教の真髄であるその他の初期の經典にも見られます。これらの經典を一つの聖典集にまとめようと最初に試みたのは、竜樹(二五〇―二五〇年)でした。彼の著書に、「經典集(Sūtra-samuccaya)」というものがありますが、残念ながら、現在に伝えられている

のは、九世紀のチベット訳と十一世紀の漢訳のものだけです。大乘教に関して、竜樹は、「菩薩の苦行 (Bodhisattva-duskaracarya)」[「困難な課題を解決するための菩薩の行動体系」という用語を用いています。正統派の声聞の批判から大乘経典を守るため、竜樹は最も権威ある経典から引用を集め、それを十三の主題に分けました。彼は、全部で六十八の経典、もしくは聖典集を用いましたが、それを初期大乘経典と考えることができません。大乘経典の分類の基礎として、竜樹は、声聞乗でもすでに用いられていた阿含 (agana: パーリ経典) と会部衆 (nikaya: サンスクリット経典) による分類を用いました。ここで、これらの経典についてお話するのは、これが、大乘教の経文を経典という形、つまりインドで生まれた「三蔵」という形で分類した唯一、初の試みであるからです。サンスクリットの仏教文献には、それ以外の試みは記録されていません。もし、現在、大乘の「三蔵」というと、それは単に仮称としてのみ用いることができます。仏教文献の漢訳、チベット訳の編纂の際には、全く別の基準で分類されています。その主な分類と

しては、経と論の立て分けがあります。論の中には、注釈と仏教著書そのものが含まれます。さて、竜樹は、理想的な菩薩の規範が示されている他の初期の経典も引用しました。それは、「大宝積経 (Maharatnakuta-sutra)」です。この経典は大変重視されており、漢の時代 (二世紀) から五回、漢訳されています。九世紀には、チベット語にも翻訳されています。しかしながら、現在残されているのは、七世紀の「迦葉品」、もしくは「迦葉の問い」と呼ばれるようになったころのサンスクリットのものだけです。この写本は、今回、展示されておりますが (編集部注 一九九八年十一月、当研究所と「法華経とシルクロード」展を共同開催した、七十四葉からなっています。この経典には、理想的菩薩の規範について、より整理された形で紹介されています。真の菩薩が備えるべき知識や行為・行動が分類されています。ここで初めて、菩提資糧 (bodhi-sambhara)、つまり、「悟りを得るために必要なもの」という意味の用語が用いられるようになりました。大乘教の文献にこの用語が用いられているということは、経典における菩薩崇

拝の始まりを物語っていることになります。

「大宝積経」によると、悟りを得るために、菩薩は、二つに分類される資質を修得しなければなりません。第一に、「福聚 (punya-sambhara)」です。ここには、「六波羅蜜」が含まれます。六波羅蜜の最初の二つは、「布施」と「戒」で、この二つが次の二つ、「忍辱」と「精進」の達成を助けます。そして、この四つの資質は、最後の二つの資質の修得に不可欠です。それは、「静慮」と「般若波羅蜜」です。

第二に、智聚 (jñāna-sambhara) です。これは、まさに、先ほど述べた「空」に入るためのものです。空を得るためには、般若が必要です。この用語は、辞書では、「智慧」と訳されていますが、「大宝積経」でいう哲学的な意味では、「絶対的直感的知識」を得るための「論証的知的認識」、「識別する力」となっています。

以上、悟りを得るために必要なこの二つの資質、つまり、二つの資糧に関する教えは、竜樹の著作やその他の後期の経典によく示されています。

「大宝積経」には、八十八のダルマが引かれており、

その内、四十四が「真実菩薩」に関するものであり、残りは、菩薩が「真実菩薩」の資質を失い、「非実菩薩」になってしまったと判断される四十四の行為について述べています。「大宝積経」や竜樹の著書に描かれている理想的な菩薩、もしくは「真実菩薩」の「菩提資糧」は、次の七つにまとめることができます。

一、「四法住」を具えている。

二、五つの「回想を伴った認識」を具えている。

三、「絶対的直感的知識」を得るために必要な資質を具えている、つまり、智慧資糧を得た。

四、善悪に関係なく、生きとし生けるものすべてを解脱の道に導き、見捨てない。

五、聴衆を説得する手段・方法を心得ている。仏の資質を表すこの用語は、『法華経』第二章 (方便品) で詳しく説明されている。

六、言ったこと、約束したことは、すぐに実行する。

七、たゆまず、福德資糧を積んでいる。

このように、理想的な菩薩の規範は、菩薩の他者救済の可能性を根拠づけるものとして初期の大乘経典に示さ

れ、次第に、細かく分類拡大され、それを通して、大乘經典では大乘教の最重要の教義として、「空」や「六波羅蜜」、「菩薩の十地」、が展開されます。

そして、二世紀から四世紀の間に、理想的な菩薩の特徴が示され、分類されている經典が数多く現れます。その中でも最も重要な經典は、二つですが、残念ながら、漢訳とチベット訳のものしか残されておりません。

時代の順番で言うと、「菩薩藏經」、次に「無尽意菩薩經」になります。この菩薩の名前は、『法華經』にも登場します。竜樹の「經典集」には、「無尽意菩薩經」から二十二箇所、引用されています。ただし、「無尽意菩薩經」自体にも、「菩薩藏」からの引用が数多くあります。理想的な菩薩としての資質が明確に分類されているのにもかかわらず、この二つの經典には、さらにイメーヂを描かせるために、「ジャータカ」、つまり、釈尊の前世に関する物語が用いられています。例えば、菩薩藏には、本生譚が十四話、引かれています。その事実から、釈尊自身が菩薩のモデルとなったことがわかります。つまり、「ジャータカ」に初めて、菩薩の姿が現れたこと

になります。また、『法華經』と共通の用語が用いられていることから、この三つの經典は、同じ教団の中で編纂されたといえます。しかしながら、「無尽意菩薩經」と「菩薩藏經」は、大幅に手が加えられており、おそらく、インドの国外で校訂されたと思われます。「ジャータカ」の他に、この二つの經典には、アビダルマ（論藏）的な「用語表」が含まれています。例えば、菩薩の有する八十種類の無尽の力や特質が列挙されており、「ジャータカ」はその意味を説明するものになっています。菩薩道は、次のように表現されています。

一、菩薩の修行の基本は、『法華經』にもあるように、六波羅蜜を段階的に修得していくことですが、この二つの經典には、どのように六波羅蜜を段階的に修得していくのか、さらに詳しく述べられています。最も基本となるものは、精神性の高い生活を送るための精神の自由です。そして、精神性が高ければ、修行の途中でどんな困難なことがあっても耐えていきます。この忍耐が、内面のエネルギーを生み、そのエネルギーが瞑想できる力を育てます。この瞑想

こそが、「般若波羅蜜」の直道です。「般若波羅蜜」を得た菩薩は、他者救済のために今世の生を続けます。これは、声聞乗の阿羅漢とは全く異なります。

阿羅漢は、瞑想をすることによって、高次元の生を得、次第に解脱、そして、阿那含へと向かいます。

二、菩薩道の第二段階は、第一段階と重なる部分が多いのですが、「十地」です。十地は、いわば、六波羅蜜を更に細かくしたものです。一つ一つの説明は避けますが、最後の法雲地に関してのみ、説明したいと思います。この段階は、菩薩が瞑想に入ったことを示します。十地を達した者のことを、理想的な菩薩の境地、菩薩の住処を得た者と呼ばれます。

このようにして、瞑想の能力は、菩薩の重要な特徴となっています。瞑想は、四無量によって達成されます。それは、「慈悲」、「大悲」、「歡喜」、「捨」です。この四つの特質こそが、最終的には「自由な洞察」や「般若」の境地へと導きます。

理想的な菩薩の規範の形成の最終段階となったのが、

七世紀末に、中国の訳經僧の菩提流支が四十九の經典を「大宝積」にまとめたことでした。その中には、迦葉品經や菩薩藏經などを初めとする、理想的菩薩の規範を様々な観点から示した二十四の經典が入っています。

「菩薩藏」という用語そのものが、時として、その他の經典や經釈に用いられていることがあります。學術書の中では、「三藏」を形成する三つの藏と類比して、この菩薩藏を、大乘教の独立した四番目の藏とする場合があります。そして、この「菩薩藏」という用語の用法を分析すると、大乘教そのものが「菩薩藏」と呼ばれていることが多いことがわかります（『法華經』の中では、「菩薩乘」もしくは「菩薩の乗り物」が大乘教の名前になっています）。その意味において、「菩薩藏」が「声聞乗」と対比されています。

さらに「菩薩藏」には、別の用法がありました。つまり、大乘教を、陀羅尼呪や金剛乗と対比させるときに用いていました。大乘教では、菩薩の超人的能力や働きを活発にするような呪文などについては一度も述べられていません。

以上のことから、本日お集まりの皆様にとってどんな教訓が得られるでしょうか。

第一に、今日、『法華経』を学ぶ者が継承していかないといけない菩薩としての主な役割は、人のために尽くすこと、助け合っていくことです。

第二に、仏は、自分の最も大切な宝である『法華経』を菩薩に授けました。ですから、菩薩は、『法華経』を世界中、宇宙の至る所に流布していかなければなりません。今日、『法華経』を学び、広めている人は、仏の遺訓を実現していることになります。

さらにもう一つ。仏教の歴史を見ると、菩薩の姿が多くの人を大乘教に惹きつけていったことがわかります。大衆は、通常、奇跡を欲し、瞬時に救われることを求めています。その大衆の気持ちを満足させるために、大乘教は、菩薩を崇拜する華やかな儀式を創り出してきました。そして、聖職者たちは、多くの信者を得ることによって利益を得ることもしばしばでした。更には、事もあらうに、菩薩が金剛乗の神々のモデルにされてしまいま

した。金剛乗では、困難な道を経てきた理想的な菩薩の純粋さが失われ、呪文を唱えるだけで瞬時に救われるとされてきました。こうした仏教の流れは、本来の仏教の原点から離れるものであり、真の菩薩像やその純粋さや深き悟りに関する教えに背くものであります。ですから、今日、理想的な菩薩の救いを信じ続ける者は、仏が『法華経』で説いた教えに最も近い人であります。これからこそ是非、この道を貫いていただきたいことを願うものであります。

(マルガリータ・I・ヴォロビヨヴァリデシャトフスカヤ／

ロシア科学アカデミー東洋学研究所

サントクトペテルブルク支部写本室主事)

(訳・みちぐち さちえ／通訳)

(本稿は一九九八年十一月九日に行われた、当研究所主催の公開講演会における講演内容です。)